

教室の沿革と現状

沿革

当教室は中川諭教授を初代所長とした札幌医大癌研究所内科学部門から発足した。

昭和39年に「癌研内科」として独立した診療科となり、翌年、漆崎一朗先生が第二代教授に就任された。昭和55年4月、診療科名は第四内科に変わり、昭和56年4月からは札幌医大内科学第四講座となった。昭和63年8月より新津洋司郎教授が、第三代教授に就任し、現在に至っている。

教室からは、平成7年札幌医大機器診断部教授を定年退職された福田守道名誉教授、札幌医大機器診断部名取博教授、旭川医大内科学第三講座高後裕教授、札幌医大検査部渡辺直樹教授、札幌医大第一病理学講座佐藤昇志教授を輩出している。国内では、静岡県立がんセンター内視鏡部、国立がんセンター内視鏡部消化器科で同門が活躍しており、現在約250名の同門会員が、様々な分野で医学に貢献している。

現況

当教室では消化器病学、血液病学、腫瘍学を三本の柱として、臨床、研究に取り組んでいる。研究は、常に臨床の場にフィードバックされることを意識して行っている。

〈消化器病学〉

診断面では消化管内視鏡の新たな応用として、拡大内視鏡による前癌病変の検出、近赤外線内視鏡による粘膜下病変の描出、バーチャルリアリティ内視鏡法の開発を行っている。治療では、Helicobacterの除菌、UC、クローン、悪性腫瘍の薬物療法および、ESD、アルゴンプラズマレーザー等の内視鏡治療はもちろん、悪性腫瘍を中心とし、種々の肝、胆、膵疾患、門脈圧亢進症に対してSub-segmental TAE、PSE、TIPS、PTO、BRTO、Reservoir 動注化学療法等の効果的かつQOLを考慮した多彩な Interventional therapy を日常的に行っている。また、インターフェロン抵抗性肝炎症例に対する瀉血/鉄制限食療法にて良好な結果を得ている (Cancer Res)。研究では、近年、大腸癌発生過程における Aberrant crypt foci の重要性と大腸癌の予防における消炎剤の有効性を明らかにし (N Engl J Med, Gastroenterology) 世界的な脚光を浴び、米国で大規模な臨床治験が始まることになった。その他、大腸癌の oncogene 発現に関する研究、鉄過剰症による肝障害 (肝癌発生機序)・アルコール性肝障害の分子生物学的解析、肝癌の血管新生機序の検討 (Clin Cancer Res)、肝線維化における (TGF- α) やコラーゲン特異的分子シャペロン HSP47の意義について解析している。

〈血液病学〉

白血病における癌遺伝子・癌抑制遺伝子の解析 (WT1、PRAD1、BCL-1等) MDS、再生不良性貧血における免疫細胞 (Th1 Th2) の関与など、免疫学的、分子生物学的アプローチを積極的に行うと共に、治療では、白血病・再生不良性貧血患者に対する骨髄移植 (ミニ移植、骨髄バンクドナー例を含めて) はもちろん、最新の治療を行っている。研究では、Stroma cell におけるサイトカイン産生とその受容体の解析 (Blood)、

TPO・TGF- β による血小板産生調節のメカニズム解析 (Blood)、血小板凝集のシグナリング解析、骨髄ならびに末梢血幹細胞を用いた新しい遺伝子治療法の開発、赤血球分子過程における各種遺伝子発現の調整機構の解明 (Blood)、血球の分化異常とアポトーシス、血小板由来増殖因子、骨髄線維症の成因等に関する研究を行っている。急性骨髄性白血病の微少残存病変に対する抗VLA4抗体を用いた化学療法の開発 (Nat Med) にも力を入れている。また、骨髄由来細胞を用いて、再生医療に貢献できる可能性についても、検討を進めている (Blood)。

〈腫瘍学〉

臨床では、早期癌病変の遺伝子診断を積極的に行うと共に、悪性腫瘍患者に対して、自己末梢血幹細胞移植を併用する超大量化学療法を施行し、本邦で先駆的な役割を担っている。研究では、将来の臨床応用を睨んだ癌の遺伝子治療の開発に力を注いでおり、新しい遺伝子導入法の開発、サイトカイン遺伝子を用いた免疫遺伝子治療、GST- π 遺伝子導入による造血幹細胞の抗癌剤からの保護等、種々の角度アプローチしている。その他、癌抑制遺伝子 p53・protein phosphatase を解するシグナル伝達機構の解析、癌の浸潤における細胞間接着因子 (カドヘリン) の役割と裏打ち蛋白 (β -カテニン) の解析、SOD 活性と癌転移能の検討、薬剤耐性と GST- π に関する研究 (Clin Cancer Res)、IL-12による腫瘍細胞表面抗原の modulation に関する研究等、多彩な研究を行っている。

〈教育〉

卒前教育の充実のみならず、より優れた臨床医を育成するために、卒後教育についても、臨床研修医の後期研修先として厳選した教育指導病院を選択し、同時に内科・消化器内視鏡・肝臓・血液学会等の認定医資格を得べくカリキュラムを組んでいる。また、国立がんセンター内視鏡部における当科出身小田一郎先生のもとでの研修カリキュラムはたいへん好評で、そこで研修を積んだ医師が、現在当科の消化器疾患臨床の中核を担っている。また全国より、骨髄移植、末梢血幹細胞移植、遺伝子治療等の研修目的で訪問研究生を受け入れている。当教室の特徴のひとつに、国際交流の深さが挙げられる。開講以来既に約90名の海外留学者を送り出しており、現在も多くの教室員が渡米し活躍中である。